安来市埋蔵文化財調査報告書第26集

小馬木古墳群

浦ヶ部地区住宅団地造成事業予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

1998年3月

安来市教育委員会

序

安来市は島根県東端部に位置し、民謡安来節とハガネの街として知られていますが、県下でも有数の埋蔵文化財が数多く所在するところでもあります。

さて、本市の目指す「活力みなぎる心豊かな文化産業都市」実現のためには、人口定住化が重要な課題であります。そのため、中海の展望と緑に囲まれ、この自然環境と併せて都市施設に恵まれた住宅環境を創出し本市の新たな定住の拠点化を目指した浦ケ部地区住宅団地の造成が計画されました。この該当地に埋蔵文化財が所在することにより、平成8年度の小汐手遺跡の調査に引き続き、本年度は小馬木古墳群の調査を行いました。

調査の結果、2号墳から銅鏡・家形埴輪が出土するなど一定の成果をあげることができました。

こうした発掘調査の成果が、市民のふるさとの歴史を理解するための一助となり、広く活用されることを切望しております。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたりましては、島根県土地開発公社をはじめ、各方面からご支援、ご協力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、今後も文化財行政に一層のご援助を賜りますようよろしくお願い申しあげます。

平成10年3月

安来市教育委員会
教育長　市川博史

例　　言

1．本書は島根県土地開発公社の委託を受けて、安来市教育委員会が平成９年度に実施した浦ケ部地区住宅団地造成事業予定地内の発掘調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は、小馬木古墳群である。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　安来市教育委員会

事 務 局　　市川博史（教育長）、成相二郎（文化振興課長）、廣江奈智雄（文化係長）

調査指導　　渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

大谷晃二（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館学芸主事）

調 査 員　　水口晶郎（文化係主事）、大塚充（同主事）、金山尚志（同主事）

調査協力　　山内英樹（島根大学学生）、三宅博士（安来市教育委員会）、仁田隆敏（同）、内田貴志（同）、遠藤浩人（同）、堀江候司（同）、二岡洋司（同）

内務整理　　泉あかね、山内英樹（島根大学学生）、赤井和代（同）、中山和美

4．現地調査、及び資料整理については、上記の調査指導・協力の諸氏の他、門脇等玄（安来市文化財保護委員の会）、東森市良（同）、根鈴輝雄（倉吉博物館）、丹羽野裕（島根県埋蔵文化財調査センター）、椿真治（同）、池淵俊一（同）、中川寧（同）、中村陵子（同）の各氏に有益なご助言とご協力をいただいた。

5．出土遺物については、安来市教育委員会で保管している。

6．本書の挿図中の方位は磁北を指す。

7．報告書の作成は以下の者が行った。

［遺物の実測］山内　赤井　水口　［遺物の写真撮影］金山　水口

8．本書の編集は山内の協力を得て、水口が行った。

目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 4
　１．調査の経過 …… 4
　２．古墳群の現状 …… 4
　３．１号墳 …… 5
　４．２号墳 …… 5
　５．３号墳 …… 15
第４章　ま と め …… 17
　１．築造時期 …… 17
　２．遺物の出土状況 …… 17
　３．家形埴輪 …… 17
図　　版
報告書妙録

挿　図　目　次

第 1 図　造成予定地内遺跡位置図（1／2,000）
第 2 図　周辺の遺跡位置図（1／25,000）
第 3 図　調査前測量図（1／1,000）
第 4 図　1号墳調査区測量図（1／200）
第 5 図　1号墳土層図（1／100）
第 6 図　2・3号墳調査区測量図（1／200）
第 7 図　2・3号墳土層図（1／100）
第 8 図　2号墳主体部実測図（1／40）
第 9 図　2号墳遺物出土状況（1／15）
第 10 図　出土遺物実測図1（1／3）
第 11 図　出土遺物実測図2（1／3）
第 12 図　出土遺物実測図3（1／3）
第 13 図　出土遺物実測図4（1／3）
第 14 図　出土遺物実測図5（1／4）

第1章　調査に至る経緯

浦ケ部地区住宅団地造成事業は平成5年に事業計画されたのをうけて、埋蔵文化財調査を平成7年度に試掘調査を実施し、平成8年度には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である小汐手遺跡の調査を行い、すべての調査を終了したかと思われた。

しかし、平成9年4月24日に開催された土地利用調整会議において議題となった浦ケ部地区住宅団地造成予定地が、文化財保護法第57条3の通知の内容と開発計画が変更されていることを、同年4月下旬県教育委員会から市教育委員会に通知をうけた。このことについて、市教育委員会は開発計画の変更の連絡を受けておらず、急遽、変更になった造成予定地を確認すると、3基の古墳が所在することが判明した。早速、事業施工者である市都市開発課と協議した結果、土地所有者である島根県土地開発公社と発掘調査の委託契約を結ぶ方向でまとまり、同年5月15日付の発掘調査依頼を受け、同年6月30日に発掘調査委託契約を結び、同年7月より現地調査を開始した。

第1図　造成予定地内遺跡位置図（S＝1／2,000）

第2章　位置と環境

小馬木古墳群は、安来市黒井田町字小馬木、小汐手に所在する。

周辺の中海南部海岸は出入りに富む典型的な沈水性海岸線をなしている。その中でも同古墳群が所在する浦ケ部地区は半島状になっており、山地が直接水中に落ち込んでおり、周辺に低地の発達はあまり見られない。

周辺の埋蔵文化財は、まず旧石器時代の遺物として同古墳群に隣接する小汐手遺跡[1]で玉髄製の削器[2]が単独で出土している。次の縄紋時代の遺跡も少なく、縄紋土器が前述の小汐手遺跡や高広遺跡[3]で若干出土しているにすぎない。弥生時代になると遺跡数が増加する。前期の遺跡は確認されていないが、中期後半になると高広遺跡・宮内遺跡[4]・大原遺跡[5]で集落が確認されている。後期になると集落遺跡は著しく増加し、小汐手遺跡・高広遺跡・宮内遺跡・大原遺跡・越峠遺跡[6]・岩屋口北遺跡[7]臼コクリ遺跡[8]・岩屋口南遺跡[9]・普請場遺跡[10]で住居跡が確認されている。この時期になると墳墓も確認されるようになり、長曽土壙墓群[11]や臼コクリ遺跡で区画や墳丘をもった土壙墓がつくられる。

古墳時代前期は新林古墳群[12]が築かれる。1号墳は径20ｍを測り、鉄剣・管玉などが副葬されている。中期になるとこの地域の首長墓として毘売塚古墳[13]が築造される。この古墳は全長42ｍの帆立貝式前方後円墳と考えられ、舟形石棺を直葬している。この他に首長墓と考えられる墳墓として前方後方墳である油坪1号墳[14]や前方部が存在する可能性がある十神山古墳[15]や大型円墳であるあんもち山古墳[16]が挙げられるが、いずれも墳丘規模は毘売塚古墳の約半分である。後期前半に10ｍ前後の小規模な古墳が築かれた後、後期後半になると横穴墓が多数築かれる。その中でも前方後円墳の墳丘をもつ浜小崎古墳群[17]・岩屋口1号墳[18]や家形石棺を内蔵し金銅装大刀を副葬した高広遺跡・宮内遺跡・臼コクリ遺跡など特筆される横穴墓も少なくない。古墳時代の集落遺跡は小汐手遺跡・長曽遺跡[19]・高広遺跡・岩屋口南遺跡・越峠遺跡・大原遺跡・普請場遺跡で住居跡が検出されている。なかでも大原遺跡では、中期の玉造工房が検出されている。

以上のように、中海東岸部は耕作可能な平野が少ないのにもかかわらず、弥生時代以降遺跡が集中している地域といえよう。

註 (1) 平成8年度　安来市教育委員会調査

(2) 島根県埋蔵文化財センター　丹羽野裕氏からご教示いただいた。

(3) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』－和田団地造成事業に伴う発掘調査－　1984

(4) 島根県教育委員会『越峠・宮内遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　1993

(5) 島根県教育委員会『臼コクリ・大原遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　1994

(6) 註 (4) に同じ

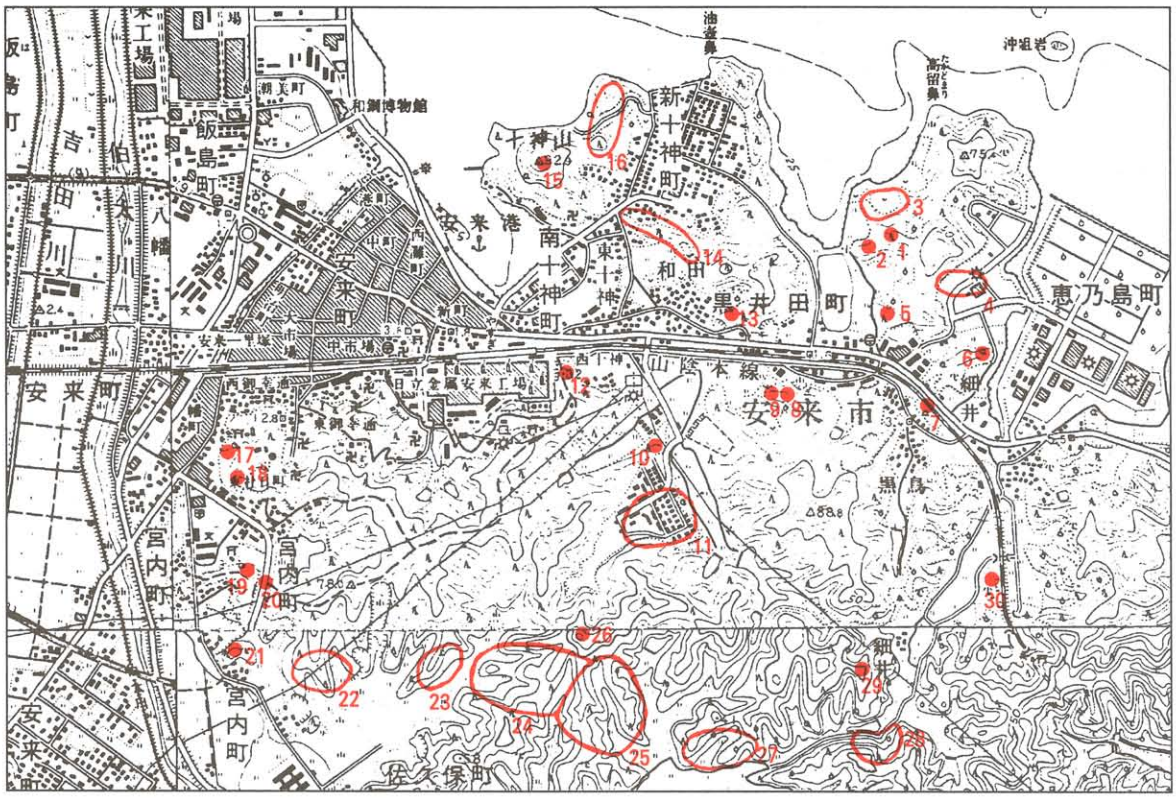
(7) 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡　臼コクリ遺跡（Ｆ区)』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13　1997

(8) 註 (5) に同じ

(9) 島根県教育委員会『岩屋口南遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　1996

(10) 島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9　1995

⑾ 安来市教育委員会『長曽土壙墓群』 1981
⑿ 平成６年度　安来市教育委員会調査
⒀ 大谷晃二・清野孝之「安来市毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第13集　1996
⒁ 平成９年度　安来市教育委員会調査
⒂ 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告』 1991
⒃ 註 ⒂ に同じ
⒄ 安来市教育委員会『浦ヶ部遺跡群発掘調査報告書』 1994
⒅ 註 ⑺ に同じ
⒆ 大森隆雄『長曽遺跡発掘調査報告書』安来市教育委員会　1978



第２図　周辺の遺跡位置図（Ｓ＝1／25,000）

1	小馬木古墳群	9	刎畑古墳群	17	社日山横穴墓群	25	岩屋口遺跡
2	小汐手遺跡	10	客さん古墳	18	堤谷横穴墓群	26	大神谷古墳
3	小汐手横穴墓群	11	高広遺跡	19	糺神社古墳群	27	越峠遺跡
4	浜小崎古墳群	12	毘売塚古墳	20	新林古墳群	28	普請場遺跡
5	長曽遺跡	13	宮の山古墳	21	あんもち山古墳	29	越峠古墳
6	米垣山横穴墓	14	油坪古墳群	22	宮内遺跡	30	大納言山古墳
7	黒鳥横穴墓群	15	十神山古墳	23	大原遺跡		
8	長曽土壙墓群	16	小十神山古墳群	24	臼コクリ遺跡		

第3章　調 査 の 概 要

1．調査の経過

調査期間は1997（平成９）年７月から1998（平成10）年１月まで実施した。途中で調査中断があり、実働は約４ヶ月である。

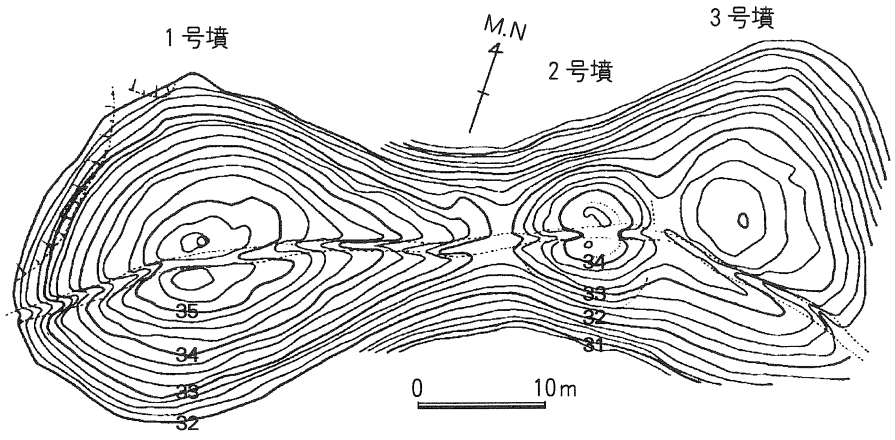
調査区全体の雑木の伐採後、調査前の地形測量を実施した。その後、表土の掘削を開始し、盛土検出後、１・３号墳の墳頂部で主体部を検出しようとしたが、盛土上面でのプランの確認は困難であった。そのため、墳丘の断ち割りを行い、何度も精査を繰り返したのにもかかわらず検出するに至らなかった。よって、１・３号墳の主体部は流失もしくは削平されているものと判断した。遺物は、１号墳の墳裾から土師器の破片を数点検出したにすぎない。３号墳からは何等遺物を検出することができなかった。

２号墳は、盛土検出後主体部の検出に努め、墳丘中央部で木棺の落ち込みのプランを検出した。また、墳丘中央部の掘削された溝の側を清掃したところ、墓壙の断面を検出した。主体部直上の供献土器・埴輪の取り上げ後主体部内部の調査に入り、木棺内埋土上面で銅鏡を検出した。墳丘の断ち割り後、最後に調査後の地形測量を作成した。

以上の作業を行い、1998（平成10）年１月21日にすべての現地調査を完了した。

2．古墳群の現状

小馬木古墳群は３基からなる古墳群である。古墳群は、通称浦ケ部山（標高80.2ｍ）から西へ伸びる標高33～35ｍの丘陵尾根上に立地する。いずれの古墳からもその北側に中海を見下ろすことができる。この古墳群は数年前まで果樹園として耕作されており、また調査区を東西に横断するように、土地境界のための深さ約50～60㎝の溝が掘削されていた。



第３図　調査前測量図（Ｓ＝1／1,000）

3．1 号 墳

墳　　丘　（第4図、5図）

1号墳は古墳群中最高所の標高35ｍに位置する。墳丘中央部を東西方向に土地境界の溝が掘られている。

調査の結果、墳丘がかなり流失しており、主体部・墳裾を確認することができなかった。また、地山には何等加工がされていないことから古墳かどうかあやぶまれるが、盛土部分と考えられる暗褐色土層が東西方向で約7ｍ残存していることや墳裾で遺物も若干出土していることから古墳の可能性が高いと考えられる。規模を復元するのは困難であるが、周囲の地形から小規模のものであろう。

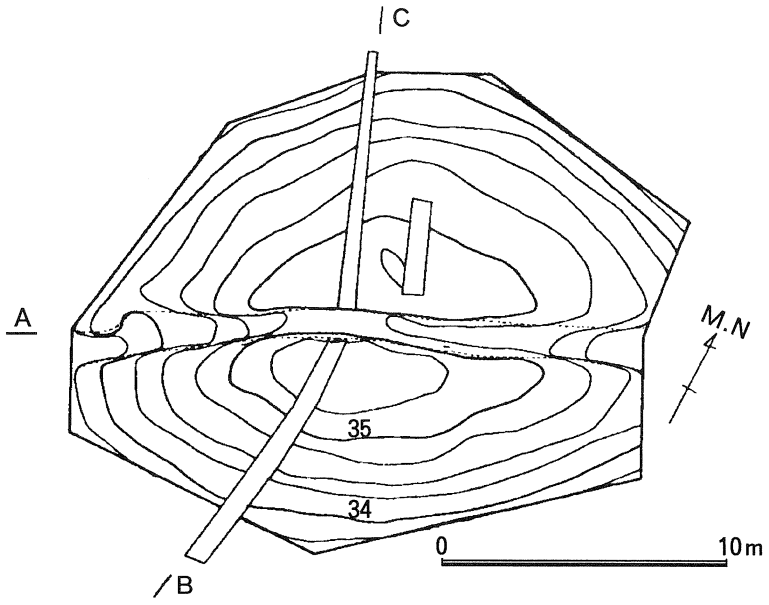
出土遺物　（第10図）

出土遺物は土師器甕片・高坏片が出土したが、細かく時期を特定するような遺物は出土しなかった。第10図(1)は土師器高坏の脚部で、端部まで残っていないが円筒部の筒部から屈曲して大きく開くものである。調整痕は、外面は風化が激しく不明であるが、内面は横方向に削っている。

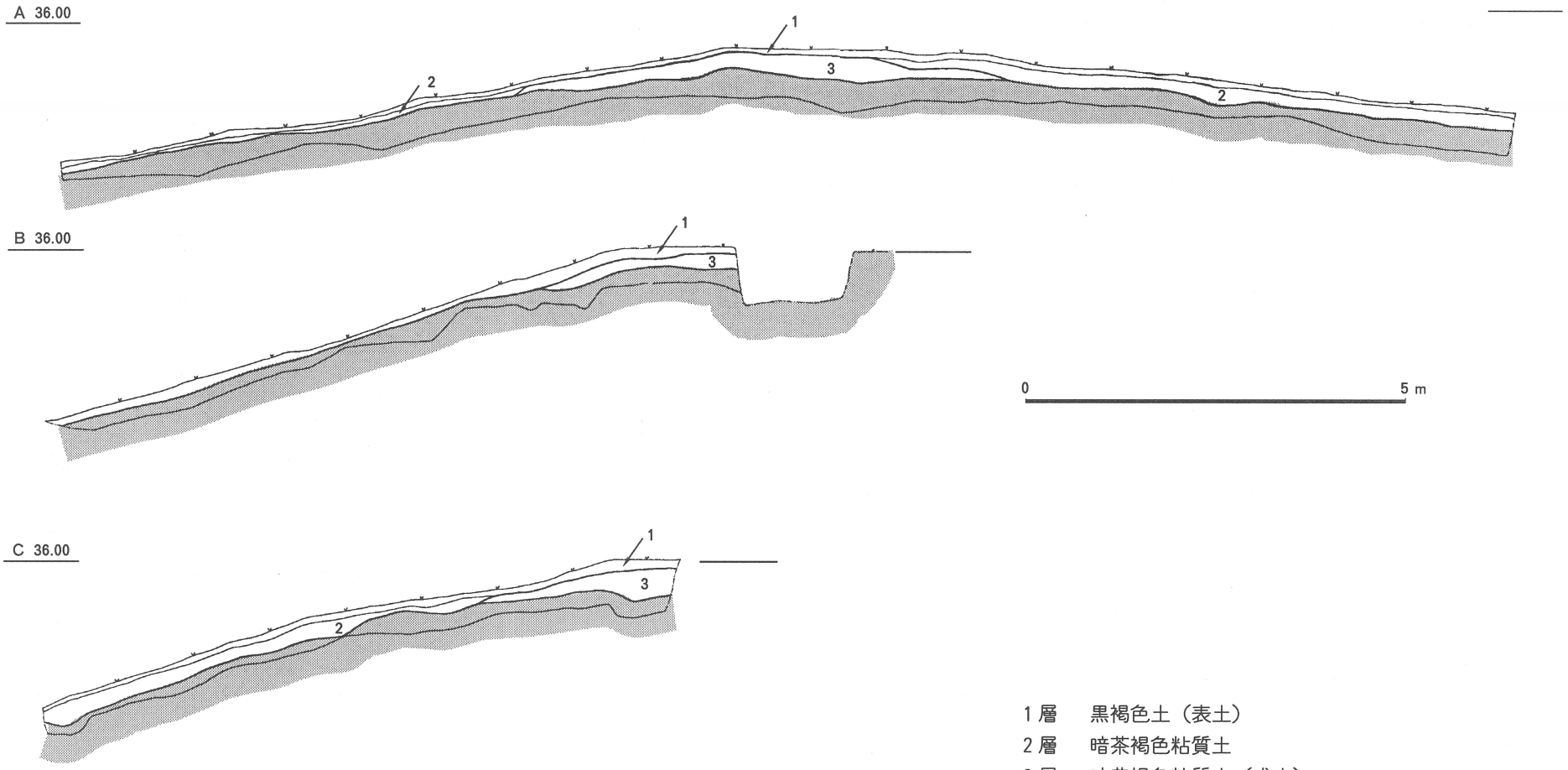
4．2 号 墳

墳　　丘　（第6図、7図）

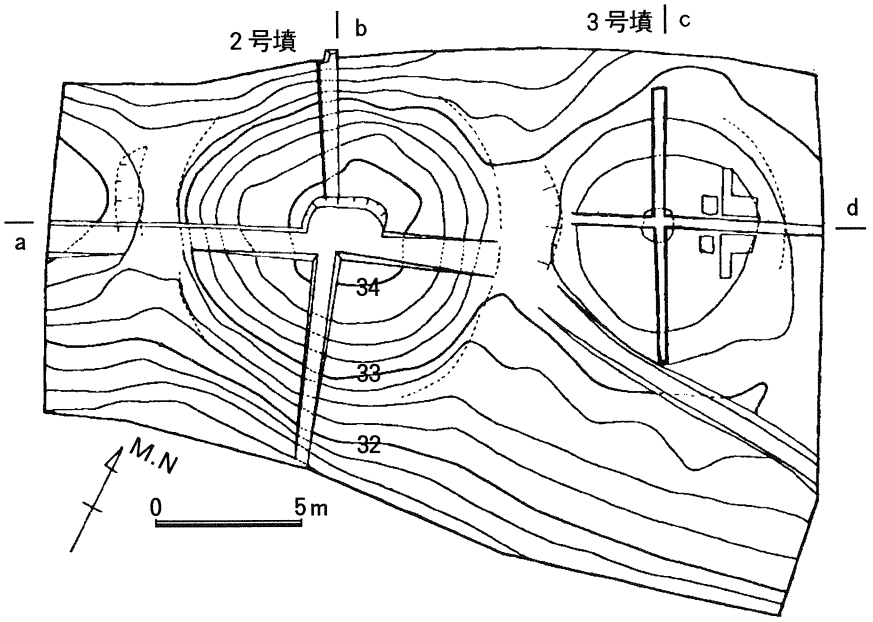
1号墳と3号墳の丘陵小ピークに挟まれた丘陵鞍部に3号墳に接して立地している。墳丘の頂部の標高は、34ｍを測る。1号墳と同様に、墳丘中央部を東西に縦断するように土地境界のための溝が掘られている。



第4図　1号墳調査区測量図（S＝1／200）



第5図　1号墳土層図（S＝1／100）



第6図　2・3号墳調査区測量図（S＝1／200）

墳形は円墳で、径約11ｍ・高さは墳丘西側で1.5ｍを測り、墳丘の東西に丘陵を切断し浅い周溝が掘られている。墳丘の南北は現状では明瞭な傾斜の変換点は確認できない。

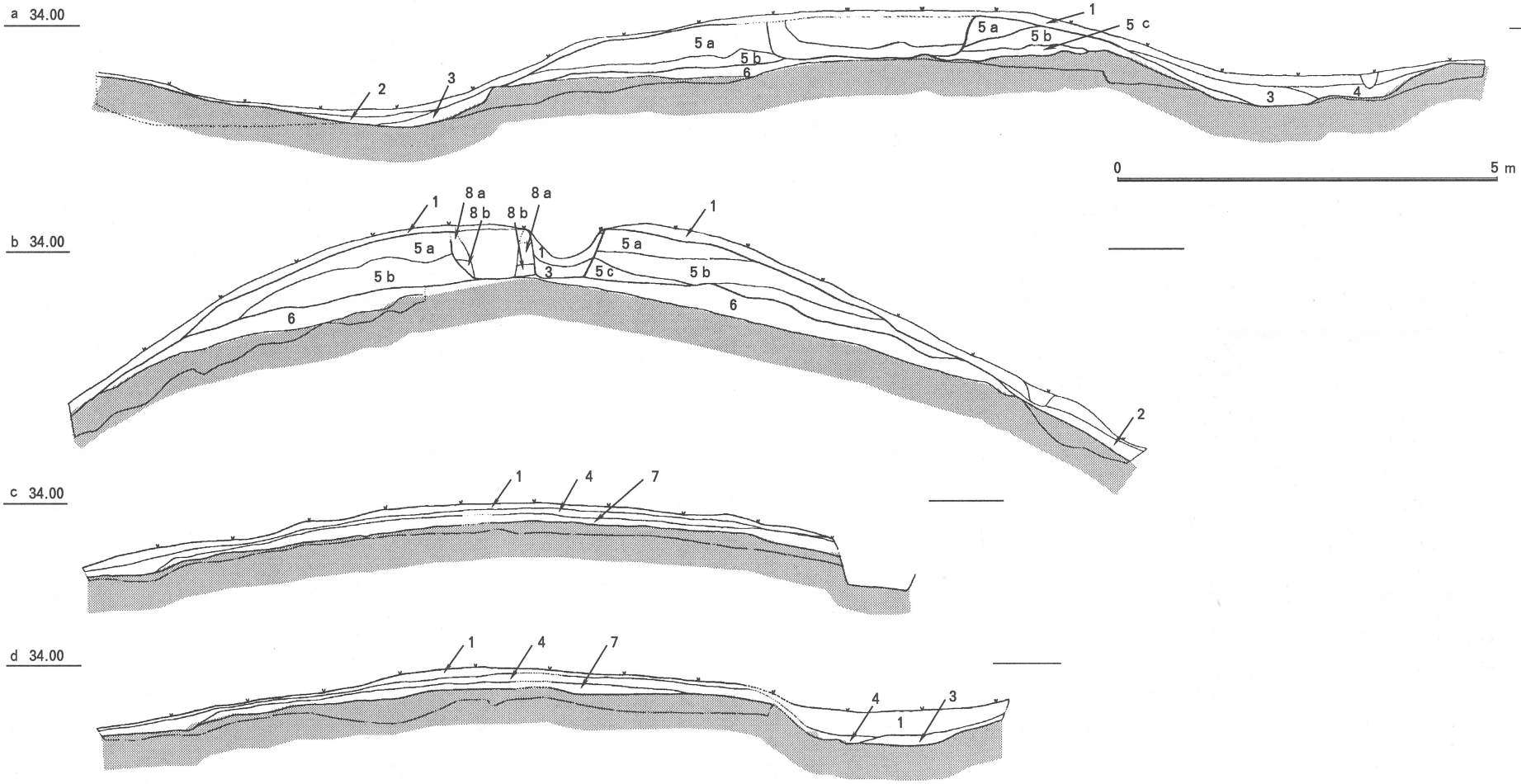
墳丘の築造は、地山の削り出しと盛土によって形成されている。東西に傾斜した旧地形のうち、傾斜が高くなっている東側を旧表土から地山にかけて台状に削りだして墳丘基盤を形成している。よって、墳丘西側のみ旧表土が遺存している。同時に周溝部分も墳丘の形状に合わせて、地山まで削り出している。墳丘基盤の上に厚さ最大約56㎝盛土を施している。盛土はまず墳丘南東部分に明褐色土を積み、その後墳丘全体に小礫を含む明褐色粘質土を積み上げている。最後に密に小礫を含む明褐色粘質土を盛り上げている。この盛土層中の小礫は地山と類似していることから、盛土層は削り出し成形の際に生じた土砂を積み上げたものと考えられる。

主体部　（第9図）

墓壙は墳丘のほぼ中央に長軸をほぼ東西に向けて位置している。墓壙は素掘りのもので、北側は地山まで掘り込まれている。墓壙の平面形は南壁側が溝によって切られているが、隅丸長方形を呈しているもの思われる。規模は長軸の上端で2.73ｍ・下端で2.22ｍ、上端で1.00ｍ以上、深さは検出面から0.54ｍを測る。棺は木棺と考えられ、墓壙の東壁の寄せて据えられていた。その規模は長軸の上端で2.32ｍ・下端で1.95ｍ、幅は西側の上端0.82ｍ・下端で0.55ｍ、東側の上端0.44ｍ・下端で0.33ｍを測る。棺の裏込め土は、赤褐色土層・淡褐色粘質土層の順で埋められている。

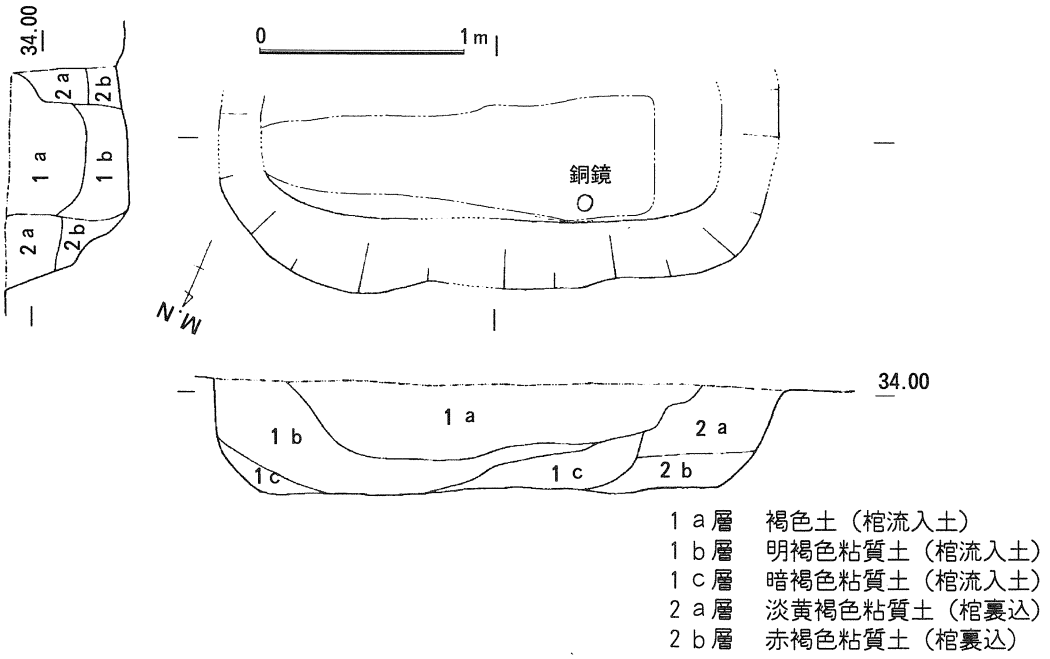
遺物の出土状況　（第8図）

墳頂部のほぼ中央に深さ約45～50㎝の浅い土壙状の落ち込みがあり、その中から西側から須恵器中型甕、土師器甕、家形埴輪が出土した。この落ち込みは、主体部の直上にあたることから、主体部直上に供献された遺物が、木棺の陥没により落ち込んだものと思われる。このことからほぼ原位置から出土したものと考えられる。須恵器中型甕は細片となっていたが、破砕された状態ではなく完形品を供献した状態で出土した。



1層　黒褐色土（表土）
2層　暗褐色土
3層　褐色粘質土
4層　黄褐色粘質土
5a層　明褐色粘質土（小礫40%含む、2号墳盛土）
5b層　明褐色粘質土（5a層より粘質強い、小礫20%含む、2号墳盛土）
5c層　明褐色土（礫含まず、2号墳盛土）
6層　暗褐色粘質土（旧表土）
7層　明黄褐色粘質土（3号墳盛土）
8a層　淡黄褐色粘質土（棺裏込）
8b層　赤褐色粘質土（棺裏込）

第7図　2・3号墳土層図（S＝1／100）



第8図　2号墳主体部実測図（S＝1／40）

主体部内からは銅鏡が出土した。表面を上に向け、木棺底から約17㎝浮いた状態で出土している。棺内流入土と思われる暗褐色粘質土層の上面に載っていることや前述の出土レベルを併せて考慮すると、この銅鏡は棺蓋の上に置かれていた、もしくは被葬者の頭部や胸部に置かれ遺骸の腐食など、何らかの原因でこの位置に移動したものと考えられる。

周溝内からは多量の円筒埴輪片が検出された。この埴輪片は周溝底面より若干浮いた状態で出土している。よって原位置を保っているとは考えられず、いずれも2次的に移動を経たものと考えられる。また、周溝内でもより墳丘側から密に出土していることから、この円筒埴輪は墳丘上に立て並べられたものと推測される。

出土遺物　（第10図、11図、12図、13図、14図）

(2)は小型の仿製鏡で、径約7㎝の珠文鏡である。概して保存状態は良好である。紐は径1.5㎝で、斜行櫛目文をはさんで2列の珠文帯があり、これらの外側を櫛目文帯、鋸歯文帯がめぐる。紐孔は実測図の上側では四角形であるが、下面は長方形を呈している。厚さは縁で3.5㎜、最も薄い部分で2.0㎜を測る。

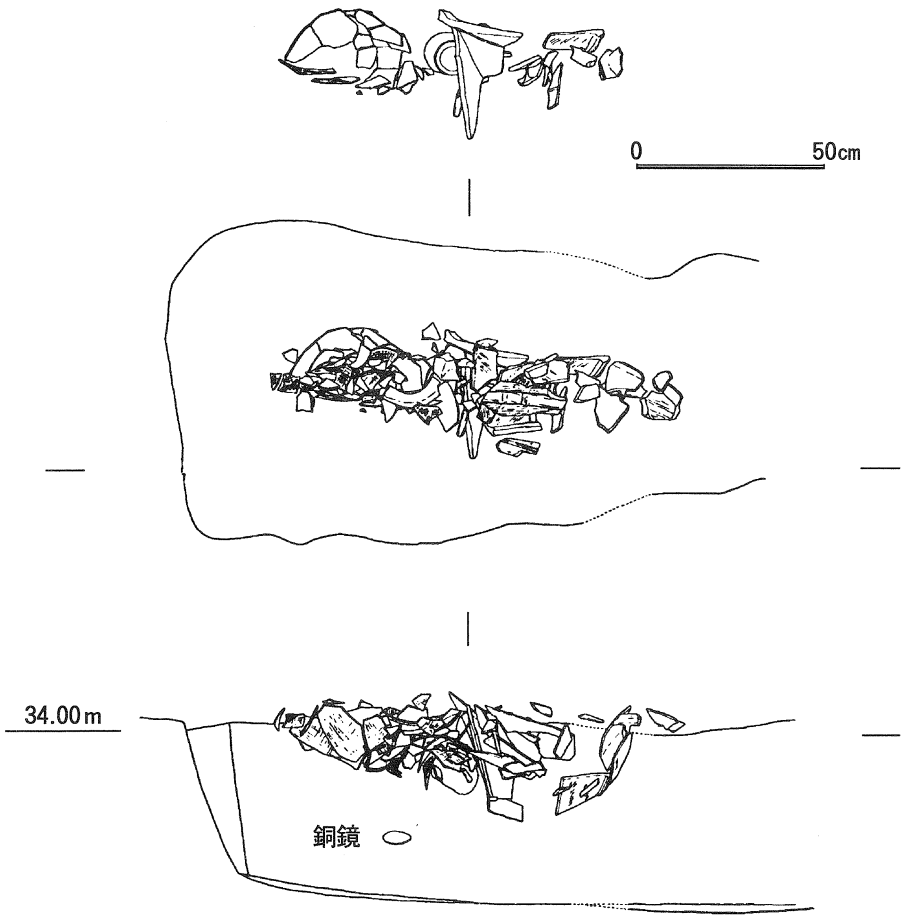
(3)の須恵器甕は、口径20.4㎝、器高33.6㎝を測る中型甕である。体部最大径に比べ口径は小さく、体部の肩部が強く張る。口縁端部を上方につまみ出し、下端部に鋭い突線がめぐっている。調整は体部外面に平行叩き、内面は調整を丁重にスリ消している。つくりの細部がシャープであり、器壁も薄い。断面はセピア色を呈している。

(4)は土師器の小型の甕で、口径11.2㎝を測る。体部の器壁は厚く、調整は外面がハケ調整、内面は縦方向に大胆に削っている。底部は焼成後に穿孔している。

(5)は全体像がほぼ復元できる円筒埴輪で、器高は約45㎝を測る。口縁部はゆるやかに内反し、口径は約17㎝である。須恵質で胎土は淡黄褐色を呈し、全体的に焼成時の歪みが見られる。タガ

は3段貼り付けており、断面は低い台形状で、頂部にわずかな凹みがある。タガ高は6～9㎜である。また、タガは横ナデによりしっかりと貼り付けており、内面にはその際についた指頭圧痕が観察できる。スカシ孔は上から2段目に、対方向に2つ穿けられており、平面形は円形である。外面の調整は細かいタテハケが主であるが、上から3段目にはタテハケのち、2次調整としてB種ヨコハケが施されている。内面はハケや指や工具によるなでが認められる。基底部は底径約13㎝で、特殊な底部調整が認められる。底部調整を施す個体に一般的に認められる押圧もしくは叩きを施し底部をのばすことを行わず、板状工具による強いナデを行った後、先端部を鋭い工具により切り取っている。また切り取った後に、底端部内外面の稜線に面取りを実施している。

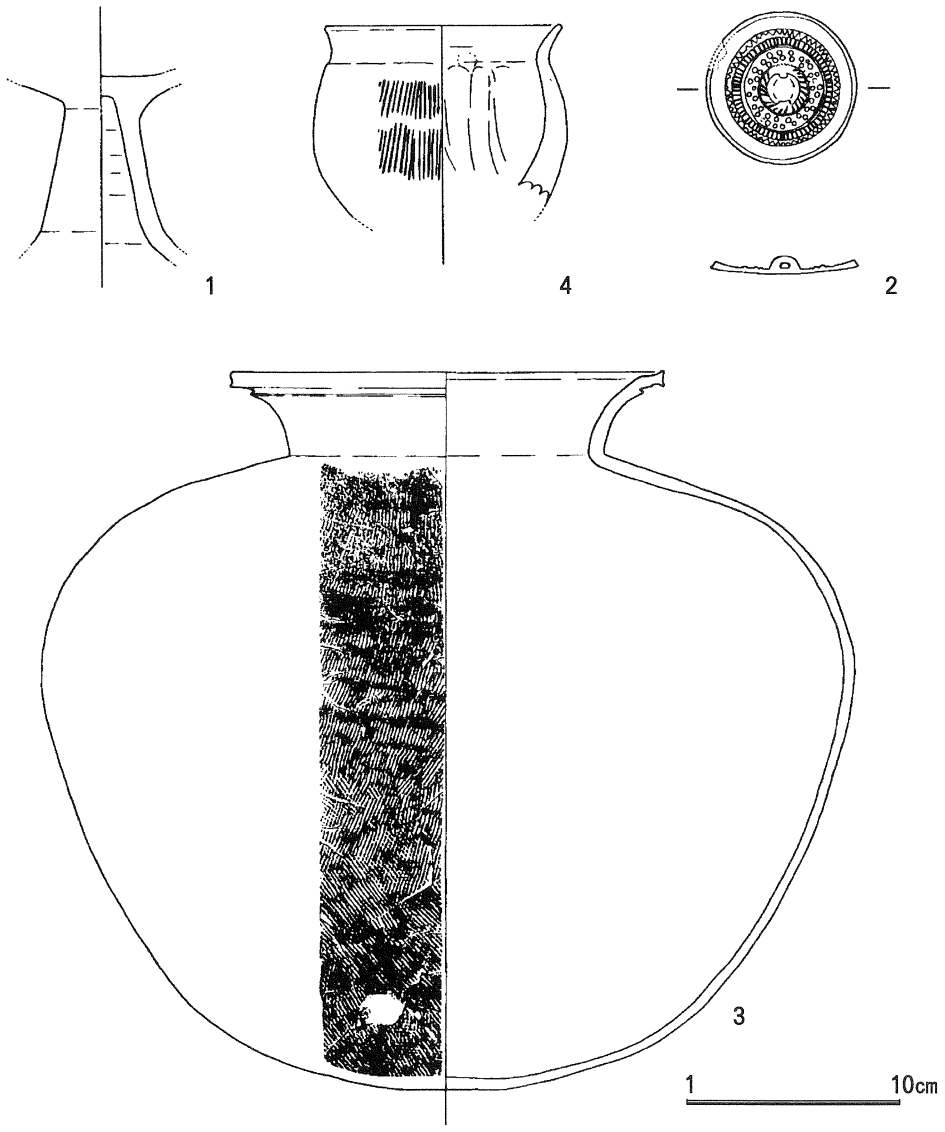
(6～8)は朝顔形埴輪の破片である。(2・3)は口縁部で、ラッパ状に外反する形状を示す。調整は外面にタテハケを施し、内面は口縁端部にヨコハケを施した後ナナメハケを施す。(6)はハケ目が細かく、胎土は淡黄褐色を呈す。焼成は脆い。(7)はハケ目が粗めで、胎土は赤燈色である。焼成は良好である。(8)はくびれ部で、器壁は厚めである。風化が著しく外面調整は不明であるが、内面には指ナデや粗いナナメハケが認められる。胎土は赤燈色で、焼成は良好である。



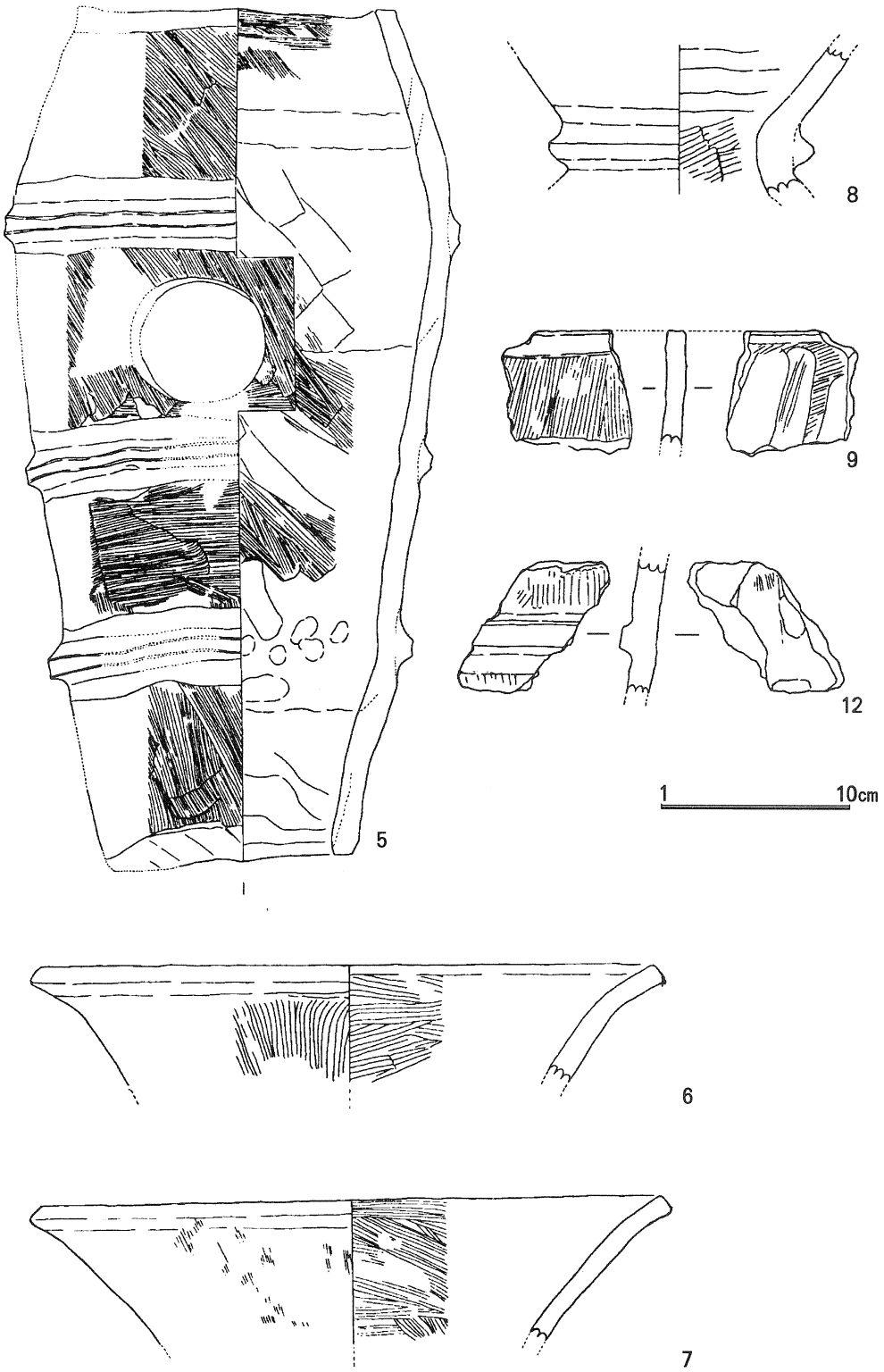
第9図　2号墳遺物出土状況（S＝1／15）

(9～11) は円筒埴輪の口縁部である。(9) は細片のため口径を復元することはできない。調整は外面が細かいタテハケを施し、内面はナナメハケ・ナデが認められる。焼成は良好で、胎土は赤褐色を呈する。(10) は口径24.5㎝で、端部が僅かに外反している。口縁端部の外面を強くナデ、僅かな段をつくっている。外面にタテハケを施し、「Γ」状のヘラ記号が刻まれている。タガは断面台形状で、タガ高は6㎜と低い。スカシ孔は楕円形を呈す。焼成は良好で、胎土は赤褐色である。(11) は口径推定22.5㎝を測り、後円部はゆるやかに外反する。(10) と同一の性格を示すことにより、同一個体の可能性がある。

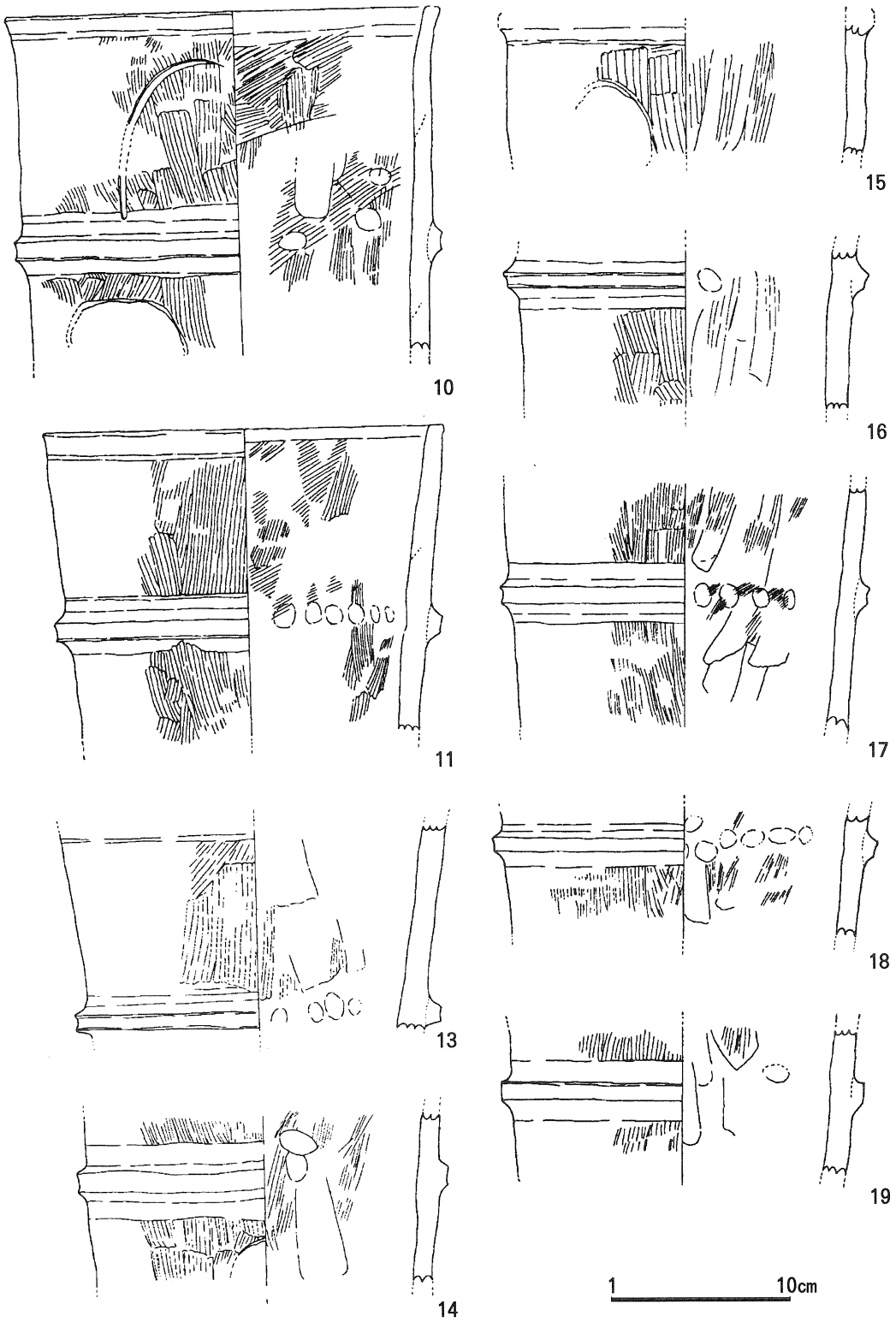
(12～19) はタガ部の破片である。総じてタガ高は5～8㎜と低く、断面台形状を呈し頂部に僅かな凹みが認められる。(12) はタガ貼付時の強いナデが認められ、外面は粗いタテハケを施す。



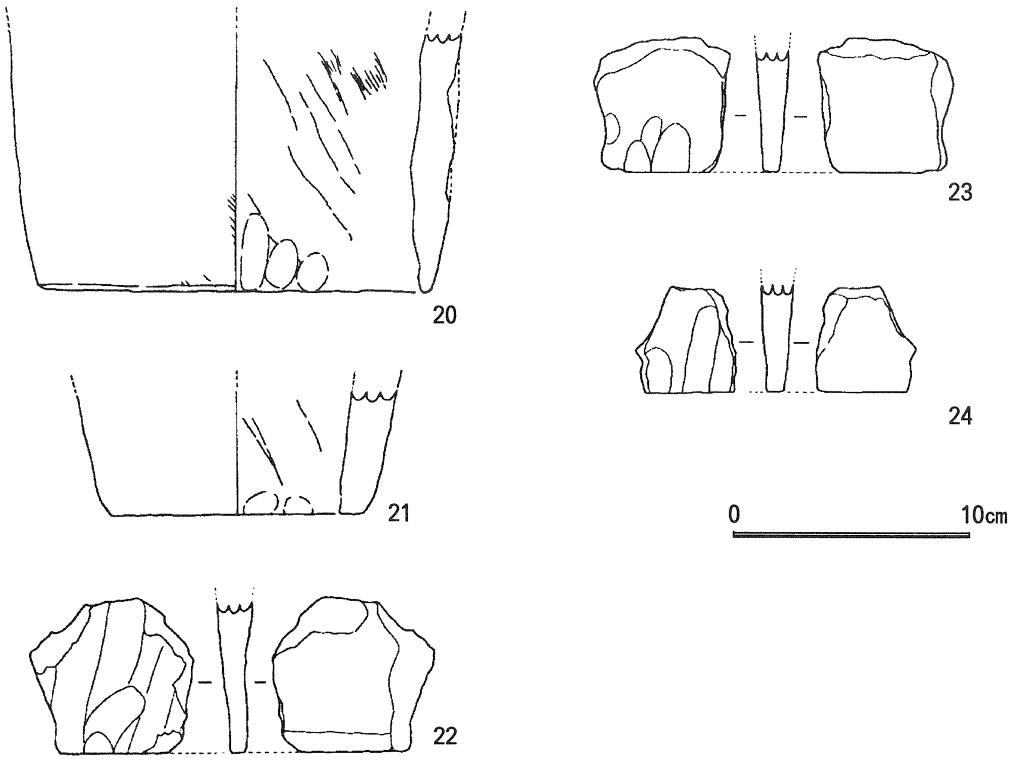
第10図　出土遺物実測図1（S＝1／3）



第11図　出土遺物実測図２（Ｓ＝1／3）



第12図　出土遺物実測図３（Ｓ＝１／３）



第13図　出土遺物実測図４（Ｓ＝1／3）

焼成は良好で、胎土は赤褐色を呈する。(13) は口縁部付近の破片と思われ、上端に口縁端部のナデらしきものが認められる。焼成は良好で、胎土は赤燈色を呈する。(14) は円形のスカシ孔が見られ内外面ともタテハケが認められる。焼成は良好で、胎土は赤燈色を呈する。(15) も円形のスカシ孔をもち、粗いタテハケを施す。焼成は良好で、胎土は赤燈色を呈する。(16) は器壁が厚い。焼成は良好で、胎土は赤燈色を呈する。(17・18) は、外面に細かいタテハケ、内面にナデや指頭圧痕が見られる。焼成は良好で、胎土は赤褐色を呈する。19は表面が大変脆く、胎土は淡黄褐色を呈する。

(20～24) は基底部破片である。(20) は風化が進んでおり調整の観察は困難であるが、内面にナデが確認できる。底端部は内面には指オサエがあり、器壁は薄目に仕上げられている。下端部は丸くおさめられている。胎土は淡黄褐色を呈する。(21) も風化が進んでおり調整の観察が困難であるが、板状工具によるナデや指オサエののち、底端部を鋭い工具で切り取っている。胎土は淡黄褐色を呈する。(22～24) は胎土は赤燈色を呈し、焼成は良好である。すべて底端部を鋭い工具で切り取っているのが観察できる。

(25) は家形埴輪である。切妻の平地式建物で、平側の破風板の両端で46㎝、妻側で25.7㎝、高さ34.5㎝を測る。棟の長さは29.1㎝で軒の長さに比べ長大にのび、妻に大きく破風板形をつくる。断面円形？の軒木を屋根部両端に貼り付けている。軒木の下に半円形のスカシ孔が開けられている。

屋根の上部約1.5㎝に粘土帯を載せ梁形を表現している。棟上に直交してほぼ等間隔に短い丸太状の堅魚木を表現している。残存しているのは4本であるが、剥離痕から7本あったことが判る。その堅魚木のうち一本には「X」状の線刻が施されている。壁は壁間の柱を取り込んだ大壁つくりで、横方向に2段のタガ状の突帯をめぐらせている。両側の平側の壁を縦長の長方形に切り取り、入り口を表現している。下部を除き、入口を一周するように線刻が施されている。

5．3号墳

墳　　丘　（第6図、7図）

3号墳は、古墳群中最も東側に位置し、1号墳と同様に丘陵尾根の小ピークに築かれている。墳丘南裾が、1・2号墳から続いている土地境界のための溝によって切られている。墳形は判然としないが円墳と推定される。

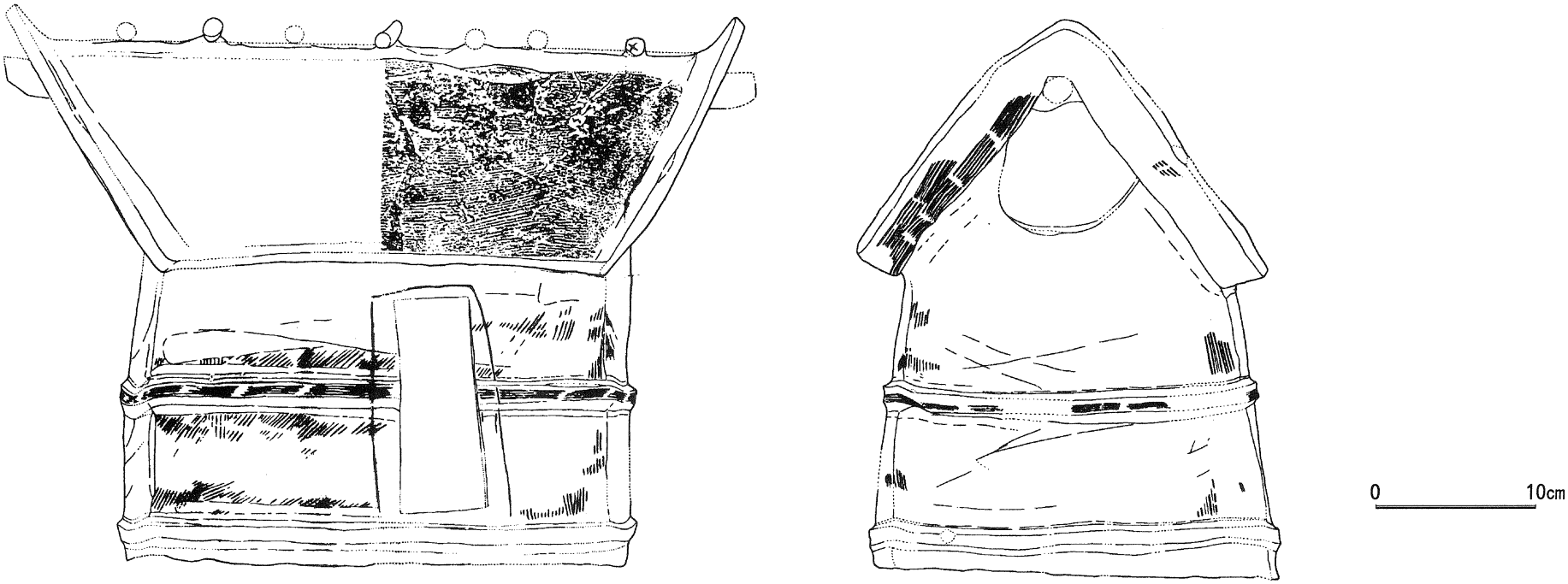
墳丘の築造は、旧表土を除き地山を成形した後、盛土を施している。この盛土は、現状では墳丘の流失が著しいため、表土下に明黄褐色粘質土の1層だけがわずかに薄く残存しているに過ぎない。この盛土層は南北方向で約11ｍ、東西方向で約8ｍ残存している。墳端は南側と西側は削平されているため不明であるが、東側で地山を削り出した痕跡が認められる。

主体部は精査を繰り返したが、1号墳と同様に墳丘がかなり流失しており検出することができなかった。

2号墳との切り合い関係は、3号墳の墳丘もしくは墳裾を切って2号墳の東側の周溝を築いていることから、3号墳が2号墳に先行して築かれていると判断できる。

出土遺物

何等出土しなかった。



第14図　出土遺物実測図5（S＝1／4）

第4章　ま　と　め

小馬木古墳群は墳長が10m前後の小規模な古墳からなる古墳群である。1号墳と3号墳は墳丘の流失が著しく主体部を検出できなかったが、2号墳は比較的墳丘の保存状態も良く豊富な遺物が出土した。以下、2号墳について調査結果を中心に整理し、若干の検討を加えてまとめとしたい。

1．築造時期

時期をある程度示す出土遺物として須恵器甕と円筒埴輪が挙げられる。

まず須恵器甕であるが、器形は体部の肩が上方で張り、内面の調整は丁重にスリ消してある。口縁端部の処理もシャープであることから、時期は陶邑編年[1]のＴＫ208～ＴＫ23型式に併行する段階であると思われる。

次に円筒埴輪であるが、すべての個体で底部再調整を施している。その中でも1個体を除き底端部を切り取る「カット技法」と呼ばれる技法[2]を施している。当地方の円筒埴輪の編年については藤永照隆氏の研究[3]があり、この技法は山本編年[4]Ⅰ～Ⅱ期にかけて見られるとされている。これは上記の須恵器の編年観とも矛盾しない。

以上のことから、築造時期は古墳時代中期後半から後期初頭にかけてと推定される。

2．遺物の出土状況

須恵器甕・土師器甕・家形埴輪が主体部直上に置かれた状況で出土した。いずれも棺上に破砕された状態ではなく完形品を供献されていた。このような状態で須恵器甕が出土した古墳は、当地方では東出雲町寺床4号墳[5]・松江市八色谷1号墳[6]・八雲村増福寺20号墳[7]、土師器甕では東出雲町寺床3号墳[8]などで知られている。いずれの古墳も墳丘規模が10m前後で築造時期が山本Ⅰ期と考えられているおり、この時期以降このような供献例は知られていない。このように古墳時代中期後半から後期初頭にかけての限られた時期の出雲地方東部における小規模古墳での葬祭儀礼の一例を示すものとして注目される。

3．家形埴輪

家形埴輪はほぼ全体を復元できた。家形埴輪の出土例は、県下では安来市大谷古墳[9]・同清水山1号墳[10]・東出雲町大木権現山2号墳[11]・松江市金崎1号墳[12]・同古曽志姥ヶ谷古墳群[13]・同平所埴輪窯跡[14]などで知られている。このうち全体の形が復元できる例は平所埴輪窯跡の2例のみであり、今回の出土例は注目される。また保存状態も良く調整痕が良好に遺存している。よってこれらの観察から、その製作工程の一部を復元することが可能である。以下、観察結果より作業工程について復元してみたい[15]。

製作工程は大きく壁廻り成形工程と屋根部製作工程に分かれる。

壁廻りの製作はあらかじめ作った4枚の粘土版を四隅で接合する方法と粘土紐を輪積みもしくは巻き上げて成形する方法があるが、今回の出土例は前者の方法を採っているように観察される。そ

れはほぼコーナー部分で割れていることや四隅の接合面の内面に粘土で補強していることから推定できる。次に壁廻りの平側外面の成形・調整の順序は、調整痕の重複関係より、ハケ調整（左下がり方向、妻側の接合面に近い部分は縦方向）→タガ貼り付け（タガを挟んでハケ調整が認められる）→タガ間、タガと屋根の間を横ナデ（ハケ調整を消している）→入り口の切り取り、入り口周りの線刻（横ナデを切っている）の順で実施しているのが観察できる。内面の調整はハケ調整の後ナデ調整を施している。

次に屋根部製作工程であるが、壁廻りから一気に製作されたと考えられる。粘土紐を積み上げ屋根部の大部分を成形後、破風板を取り付け棟部で閉塞している。これは棟部分の内面の粘土が両側の屋根部の内面の粘土のうえにかかっているのが観察できることから推測される。破風板の取り付けと棟部分の閉塞の前後関係は観察することができなかった。この破風板の取り付けと棟部分の閉塞の後に、屋根部外面全体に横方向にハケ調整を施している。次に棟部に薄く粘土を載せ梁部を表現し、その上に堅魚木を載せている。また妻側の棟下部に棟木を取り付け、完成させたものと想定される。

以上、製作工程について簡単に述べてきた。今回、他遺跡出土の家形埴輪の観察・比較を行えなかった。形態・製作技法の観察により形象埴輪の製作工人集団を浮かび上がらせる事ができるのではないだろうか。しかし、当地方では資料の絶対数が少ないように思われる。今後遺存状態の良好な資料の出土がまたれる。

註 (1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』　平安学園考古学クラブ　1966

(2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』　19－3　1978

(3) 藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集　1997

(4) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』　1960

(5) 東出雲町教育委員会『寺床遺跡調査概報』　1983

(6) 島根県教育委員会『八色谷古墳群』国道431号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　1993

(7) 八雲村教育委員会『昭和56年度宝満山地区公害防除特別改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書』　1982

(8) 註(5)と同じ

(9) 内田才「原始・古代」『安来市誌』　1970

(10) 安来市教育委員会『清水山古墳群発掘調査報告書』　1994

(11) 東出雲町教育委員会『大木権現山古墳群』　1979

(12) 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』　1977

(13) 島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査　1989

(14) 島根県教育委員会『重要文化財平所埴輪窯跡出土品復元修理報告書』　1981

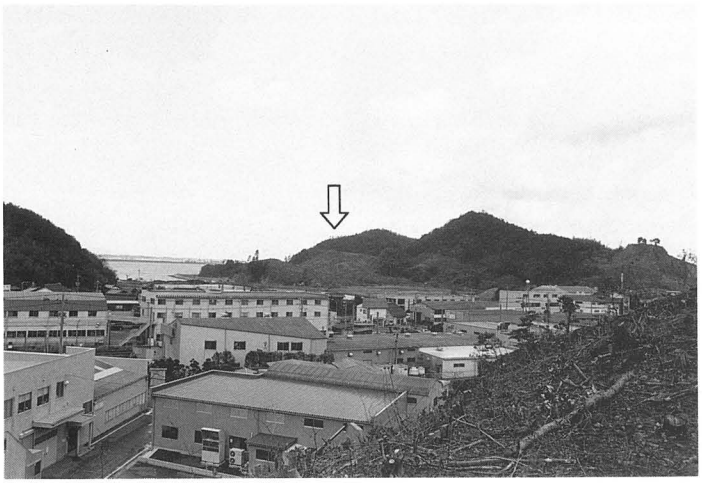
(15) 製作工程の復元については、以下の文献を参考にした。

岡村勝行「家形埴輪について」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ」　1991　(財)大阪市文化財協会

青柳泰介「家形埴輪の製作技法について」『家形はにわ』日本の美術5　№348　1995

図　　版

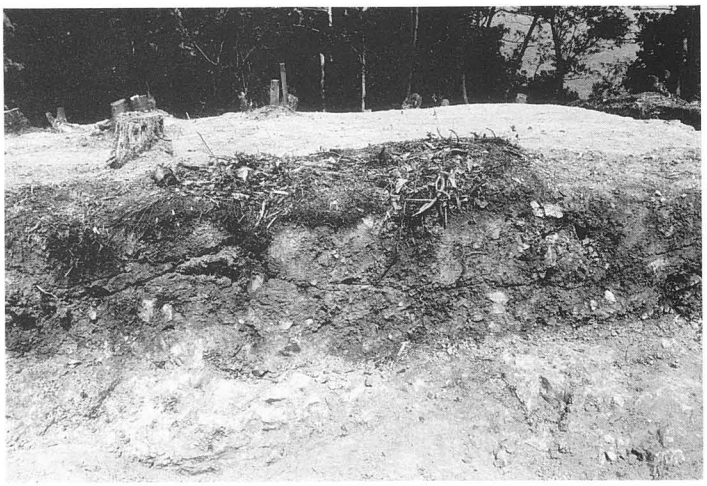
遺物写真の番号は本文中の実測番号に対応する



遺跡遠景（南から）

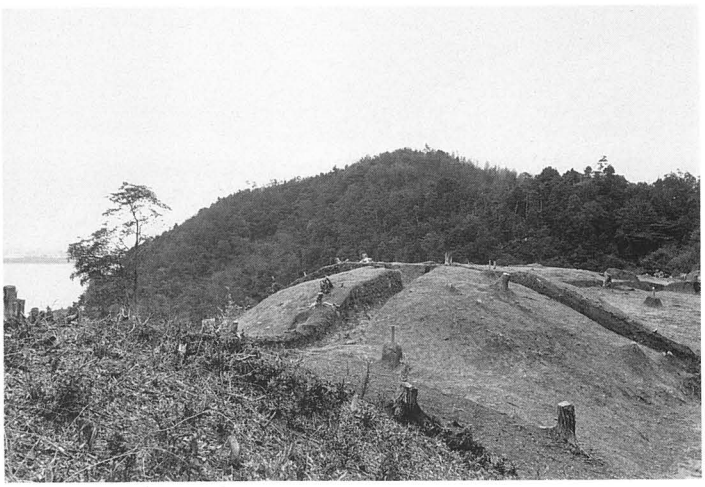
遺跡遠景（西から）

1号墳（東から）



1号墳　東西セクション

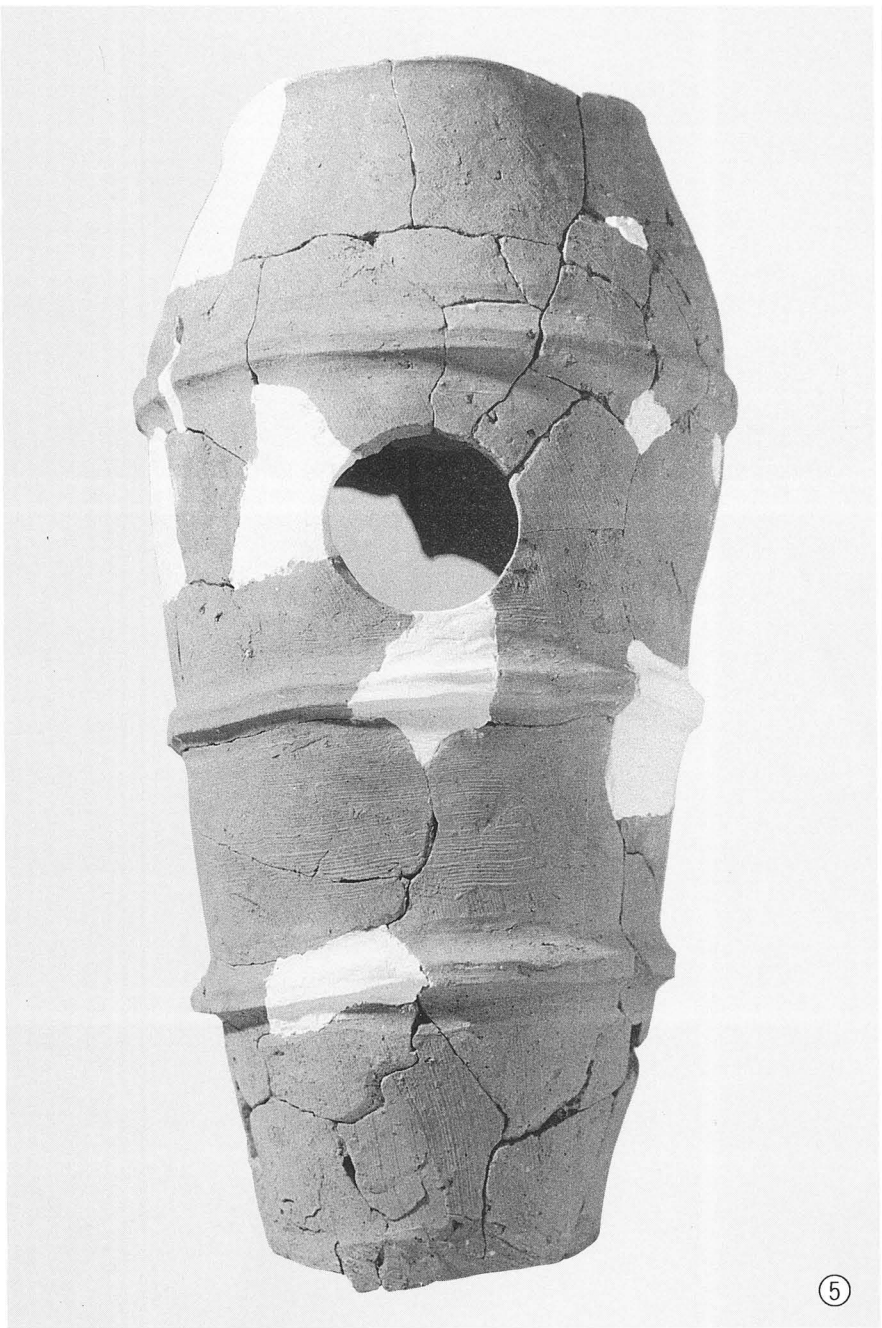
2号墳・3号墳（西から）



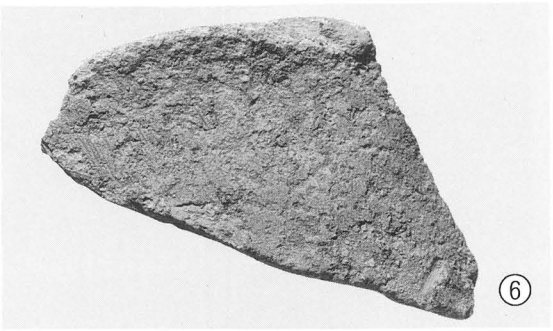
2号墳（南西から）

2号墳　東西セクション（西側）

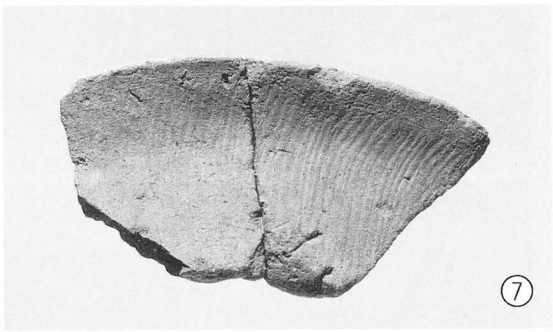
2号墳　東西セクション（東側）



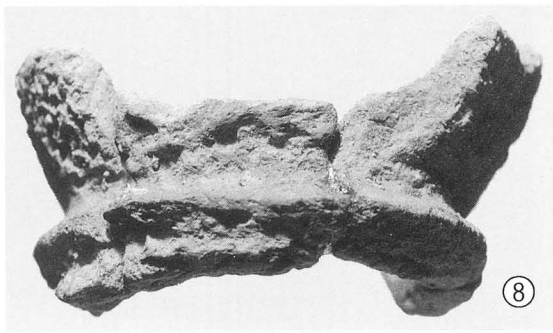
⑤



⑥

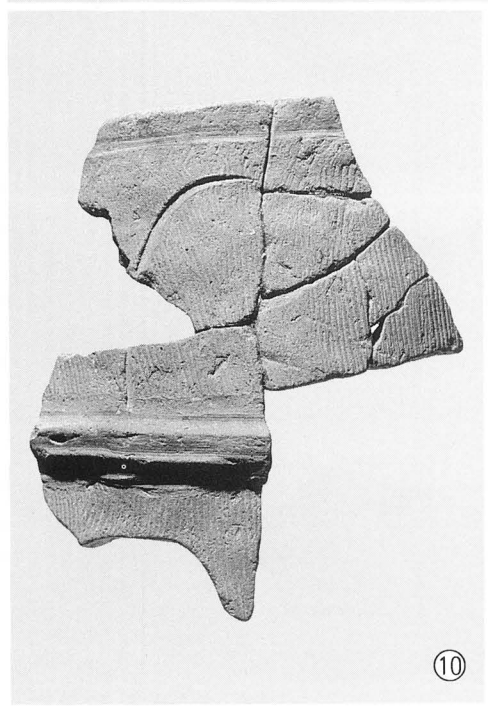


⑦

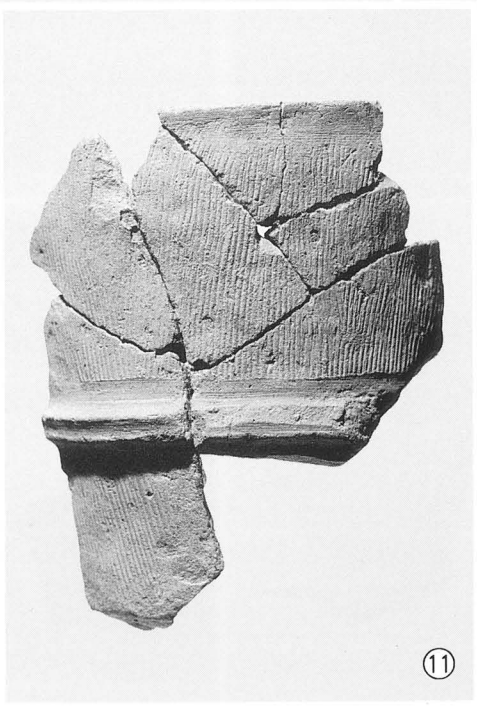


⑧

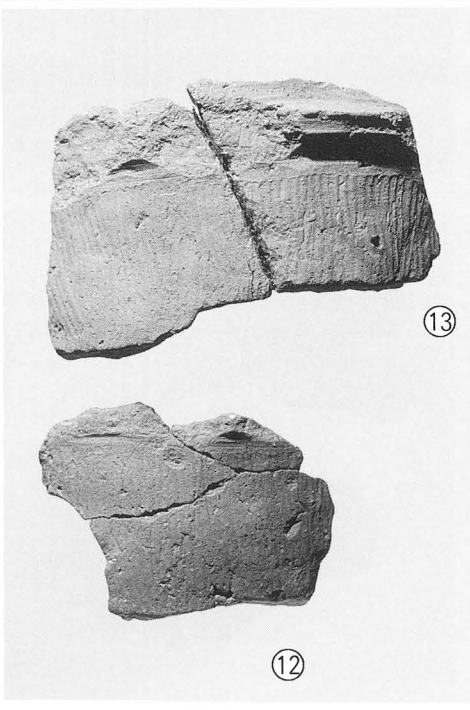
⑨



⑩



⑪



⑫ ⑬

報 告 書 妙 録

フ リ ガ ナ	コマキコフングン
書　　名	小馬木古墳群
副 書 名	浦ヶ部住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	1
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
編 著 者 名	水 口 晶 郎 ・ 山 内 英 樹
編 集 機 関	安来市教育委員会
所 在 地	〒692-0011　島根県安来市安来町874-20　　ＴＥＬ　0854－22－3927
発行年月日	西暦1998年３月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
小馬木古墳群（コマキコフングン）	島根県安来市（シマネケンヤスギシ）黒井田町（クロイダチョウ）					19970701 19980121	1,000	住宅団地造成

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小馬木古墳群	古墳群	古墳時代	古墳　３基	須恵器・土師器 円筒埴輪・家形埴輪 銅鏡	小規模古墳より豊富な遺物が出土

小 馬 木 古 墳 群　　安来市埋蔵文化財調査報告書第26集

浦ヶ部住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財調査報告書 1　　1998年３月

発行　安来市教育委員会　　印刷　㈲ 岩 田 印 刷